

平成 21 年 6 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19730435

研究課題名（和文） 恥感情の生起メカニズムと恥の多面的な測定

研究課題名（英文） Assessment of shame experience by quasi-projective method and individual differences in emotion recognition tasks

研究代表者

岡田 顕宏（OKADA AKIHIRO）

札幌国際大学・人文学部・准教授

研究者番号：20337083

## 研究成果の概要：

本研究では、表情認知実験および情動知能関連尺度を通して情動関連能力の個人差を測定するとともに、準投影法的質問紙を用いた調査を通して、葛藤場面における恥の意識化能力の個人差について検討した。恥の感情は、ネガティブと解釈される事象に対する単なる情動反応としてだけではなく、そのような情動体験を恥として意識化するという情動の意識化のプロセスまでを含めて検討するべきであり、そのことが、社会における適応的な行動調節としての恥にとって重要であることが示唆された。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：(C)心理アセスメント

## 1. 研究開始当初の背景

恥の感情に関する従来の研究は、質問紙を用いて、恥の個人的傾向や特性を一次的に測定し、その得点が情緒不安定や社会不適応などと相関することを根拠に、恥感情や恥感情と関連するとされる認知様式が社会不適応や精神病理の原因であると主張している。しかしながら、個人特性は、恥の体験や恥との関連が想定される行動や思考に関する頻度の主観的評価を測定しているだけであって、感情としての恥の機能を吟味しているわ

けではない。感情としての恥機能について明らかにするためには、より多面的な検討が必要である。

## 2. 研究の目的

対人関係のように複雑な相互作用が生じうる状況で自らの行動を適応的に調節するためには、自分の行動に対する他者の感情的な反応（表情など）をフィードバックして適切に理解する必要がある。また、他者からの

ネガティブなフィードバックを将来の行動調節に反映させるためにも、恥のようなネガティブな感情として経験されることが必要であると考えられる。本研究では、恥の感情を、社会適応に必要な機能の一つと考え、他者の表情を読みとる個人の能力と、個人の恥経験との関係の解明を試みることを目的に行われた。

### 3. 研究の方法

表情認知能力の測定。個人の表情認知能力を測定するために、4つの実験を実施した。実験1では、Petrides & Frunham (2003)に倣い、中立表情から、種々の表情（本実験では、嫌悪、悲しみ、喜びを使用）へとモーフィングによって漸進的に変化する表情写真を被験者に提示して、被験者に表情判断を求めた。実験2および実験3では、表情写真を瞬間提示（25ms, 50ms, 75ms）し、表情写真の快性（快か不快か）の判断を被験者に求めた。実験2では、快性判断の閾値測定を行うために嫌悪と喜びの表情を使用し、実験3では、快性判断におけるバイアスを検討するために、中立表情と驚きの表情を使用した。実験2および3を実施した結果、25msであっても表情判断が比較的容易であったことから、実験4では、表情刺激に対するマスクを変更し、さらに提示時間を変更して、表情の快性判断の実験を行った。また、表情認知に特化した能力の個人差を検討するために、同一の材料を用いた性別判断課題も同時に施行した。

以上の実験に前後して、被験者のパーソナリティ特性（MPIを使用）、特性情動知能（EQSおよびTEIQを使用）、アレキシミア傾向（TAS-20を使用）、自己意識感情特性（TOSCA-A 日本語版を使用）の測定を行った。

準投影法的質問紙による自己意識的感情の調査。シナリオベースの質問紙である「自己意識的感情尺度青年版（TOSCA-A；岡田, 2003）」のシナリオ部分のみを被験者に提示して、その場面状況に対する感情評定および自由記述による反応を求めた。TOSCA-Aのシナリオが基本的に対人的な葛藤に関連していることから、P-Fスタディ（Rosenzweig, 1978）で用いられているスコアリングシステムを用いて、自由記述反応の分類を行った。また、潜在的な恥の感受性について検討するために、場面状況をどの程度自分自身と関連づけているかの程度（自己関連度）を、記述文字数と文章表現、対象関係の有無にしたがって3段階で評定を行った。

## 4. 研究成果

### 4.1. 表情認知能力の測定

**実験1：モーフィングされた顔刺激に対する表情判断。**表情変化の最終段階での正反応率について、表情と性別を要因とする二要因の分散分析を行った結果、嫌悪表情の正答率は他の2つの表情の正答率よりも有意に低かった（いずれも  $p < .01$ ）。正答率の性差は有意ではなかった。正反応段階について、同様の分散分析を行った結果、性別と表情の有意な主効果および交互作用があった。女性被験者は一般的に男性よりも正反応段階が早く、男性は女性よりも嫌悪および悲しみの表情に対する正反応段階が有意に遅かった。男女別に、表情判断の正答率および正反応段階と情動知能尺度得点との相関をみたところ、女性のみ、TEIQ得点と嫌悪表情の正反応段階との間に中程度の負の相関（ $r = -.50, p < .10$ ）があった。

表1 正反応段階と各尺度との相関

Scale	sex	Facial Expression			
		Happy	Disgust	Sad	All
TEIQ	male	0.04	-0.15	-0.10	-0.09
	female	0.13	0.01	0.27	0.16
EQS	male	-0.03	0.04	-0.14	-0.06
	female	-0.20	-0.02	0.02	-0.08
MPI: E	male	0.19	0.12	-0.04	0.09
	female	0.16	0.25	0.45	0.32
MPI: N	male	0.51	0.23	0.18	0.34
	female	-0.34	-0.21	-0.25	-0.31

**実験2：瞬間提示表情に対する快性判断。**提示時間条件毎に表情判断の正解率と  $d$  とを算出した。全体的に正解率は高く、提示時間 25ms, 50ms, 75ms での正解率はそれぞれ、93.1%、96.5%、97.6%であった。

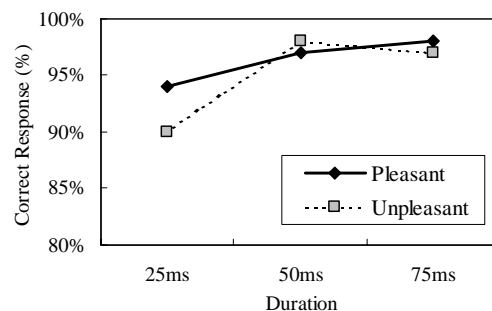


図1. 各提示時間における快・不快判断の正答率。

正解率について顔の表情と提示時間および性別を要因とする3要因の分散分析を行ったところ、提示時間の主効果のみ有意であった（ $F(2, 38) = 11.2, p < .01$ ）。反応潜時について同様の分析を行った場合も提示時間の

主効果のみが有意であった( $F(2, 38) = 10.6, p < .01$ )。d について呈示時間と性別を要因とする分散分析を行ったが、呈示時間の主効果のみが有意であった( $F(2, 38) = 12.5, p < .01$ )。TEIQ、EQS など情動知能尺度得点の高低を要因に含めた場合、これらの要因を含む有意な効果は見られなかった。

**実験 3: 瞬間呈示表情に対する快性判断のバイアス**。驚き表情に対する「不快」反応率は、TEIQ および MPI の E 得点と有意な正の相関を示した(それぞれ  $r = .65, p < .01, r = .54, p < .02$ )。中立表情に対する不快反応率は、有意ではないが、TEIQ、EQS、E と負の相関を、N と正の相関を示した。

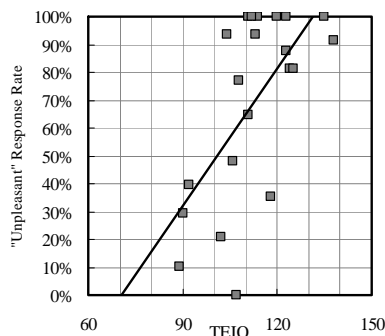
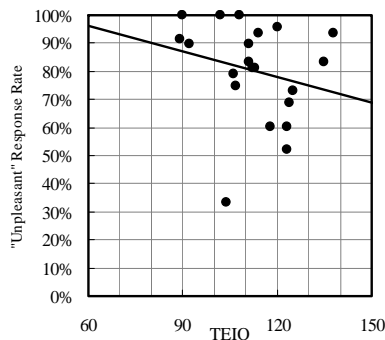


図 2 . TEIQ と「不快」反応率の相関図 (上 = 中立表情, 下 = 驚き表情)。

**実験 4: 瞬間呈示表情に対する快性判断**。全体的に、表情認知(快不快判断)と比べて、性別判断の方が成績が低かった。これは、使用した刺激材料の影響によるものと考えられる。

被験者をアレキシサイミア尺度(TAS-20)の高低に分けて、顔写真表情の快不快判断および顔写真の性別判断に対する正解率について分析を行った結果、性別判断の正解率は、TAS-20 の得点の高低による違いはないのに対して、表情判断の正解率に関しては、TAS-20 の高群と低群の間で、有意差があり、TAS-20 低群の正解率が、高群の正解率を上回った。特に、これらの傾向は呈示時間の短い、20ms および 30ms で顕著であり(それぞれ、

$t(18) = 2.23, p < .05; t(18) = 3.11, p < .01$ )、40ms および 50ms においては、TAS-20 の得点による差は有意ではなかった(それぞれ、 $t(18) = 1.75, p = .097; t(18) = 1.44, p = .17$ )。

以上のことから、アレキシサイミア傾向の高い個人は、低い個人に比べて、自己の感情の意識化・言語化が困難だけでなく、他者表情の理解においてもやや困難のあることが推定された。同じ刺激材料を用いた性別判断においては両者に差のないことから、全般的な認知判断や課題遂行というだけでなく、これらの結果は、表情認知または感情理解に特化した能力の個人差であると考えられる。

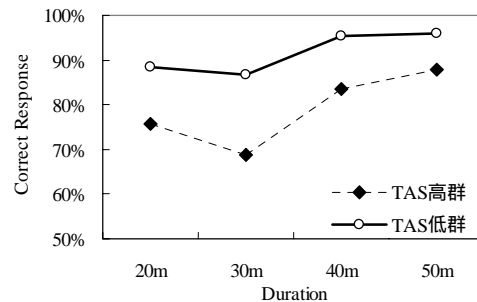


図 3 . 各呈示時間条件における快不快判断の正解率。

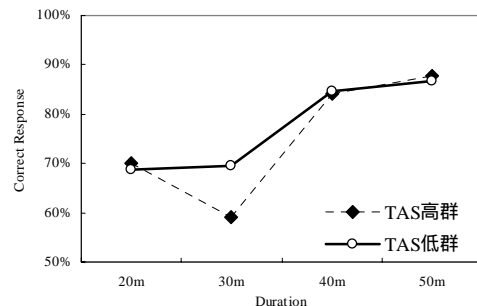


図 4 . 各呈示時間条件における性別判断の正解率。

#### 4.2. 準投影法的質問紙による自己意識的感情の調査

自由記述の内容と、元の TOSCA-A の選択肢の内容との一致について調べたところ、選択肢と一致する回答は全体の 12.3%と少なく、元の TOSCA において「shame」を反映されるとされる選択肢(逃避・隠蔽・自己全体への帰属など)との一致は、ネガティブ場面において 1.2%と極めて少なかった。また、自由記述の中にあらわれた全感情語のうちに、「恥」に関する記述は 9.2%であり、葛藤を生じさせるような場面において「恥」という直接的言語的表現がなされることは少ない、ということが示唆された。

ネガティブ場面 10 場面に対する自由記述

内容を、P-F スタディのスコアリング・システムを用いて分類を行った。分類カテゴリに頻度についての性差はみられず ( $\chi^2(9) = 10.3, n.s.$ )。多くの被検査は、失敗場面において、謝罪 (I) 補償行動 (i) と解釈されるような反応を行った。

表2 TOSCA-A 選択肢との一致率

TOSCAの 反応分類	ポジティブ 場面	ネガティブ 場面	全体
Shame	0.2%	1.2%	0.9%
Guilt	3.3%	8.8%	7.0%
Detached		1.8%	1.8%
Externalization	1.3%	1.7%	1.6%
Alpha Pride	1.5%	-	1.5%
Beta Pride	3.7%	-	3.7%
合計	9.8%	13.5%	12.3%

表3 自由記述における情動用語の割合

情動用語	ポジティブ 場面	ネガティブ 場面	全体
恥	3.0%	13.7%	9.2%
罪悪感	10.0%	29.4%	21.2%
否認	2.8%	9.5%	6.6%
怒り	1.1%	3.0%	2.2%
ポジティブ	52.9%	4.0%	24.6%
不安・抑うつ	19.9%	32.6%	27.3%
その他	10.2%	7.8%	8.9%

また、自己関連度得点の高低によって、被験者を高群 (平均 + 1 標準偏差以上) と低群 (平均 - 1 標準偏差以下) に分けて、反応内容分類を比較した。自己関連度の高い者は、そうでない者に比べて、不安や困惑 (I', M')、罪悪感 (I) などの感情表出をしやすいのと同時に、補償行動 (I') の表明が少ない、という傾向があった。一方、自己関連度が低い者は、一般的に感情についての言及が少なく、葛藤そのものを否認するような反応 (M) が多かった ( $\chi^2(9) = 24.3, p < .01$ )。

表4 ネガティブ場面对する反応分類

	O-D 障害優位		E-D 自我防衛		N-P 要求固執		合計	
	E'	E	e	E-A	E-A	E-A		
E-A 外罰	高群	11.7%	高群	4.8%	高群	0.6%	高群	17.0%
	低群	7.2%	低群	4.9%	低群	1.5%	低群	13.5%
I-A 自罰	I'		I		i		I-A	
	高群	7.2%	高群	24.1%	高群	32.4%	高群	63.7%
	低群	1.5%	低群	13.1%	低群	38.2%	低群	52.8%
M-A 無罰	M'		M		m		M-A	
	高群	6.5%	高群	5.9%	高群	6.9%	高群	19.3%
	低群	2.6%	低群	19.9%	低群	8.7%	低群	31.3%
合計	O-D		E-D		N-P		U	
	高群	25.4%	高群	34.8%	高群	39.8%	高群	19.3%
	低群	11.3%	低群	37.9%	低群	48.4%	低群	31.3%

失敗状況に対する自己関連度が低い者 (意識的な恥の感覚が乏しいと考えられる者) は、感情について言及せず、状況を取り繕うような行動が目立った。これは、葛藤を内面にとどめることが困難な精神的な未熟さを反映している可能性がある。それとは反対に、自己関連度が高い者 (意識的な恥の感覚が強すぎると考えられる者) は、不安と抑うつといった否定的感情に支配されやすい傾向が示された。

#### 4.3. まとめ

一連の実験結果から、情動知能得点が高い個人ほど、少ない手がかりで表情判断を正確に行い、中立表情と比較して驚愕表情に対して、より不快な表情であると判断する傾向が示された (実験1および実験3)。また、アレキシサイミア傾向の高い個人は、そうでない個人と比べて、性別判断においては差はないものの、表情判断においては、特に短い呈示時間 (30ms 以下) において表情判断が不正確であることが示された。

一方、準投影法的質問紙に関しては、自己意識的感情尺度青年版 (岡田, 2003) の場面状況を呈示して、感情評定と自由記述反応を行わせた。自由記述において自己に関する言及が多い群と少ない群とに分けて比較したところ、自己言及が多い群では、不安や困惑、罪悪感などの感情に関する言及が多いのに対して、自己言及が少ない群では、感情に関する記述が少なく、葛藤を否認するような反応が多く見られた。

近年、恥体験そのものではなく、恥と密接に関連すると見なされている思考様式 (全体的自己への帰属) や行為傾向 (逃避・隠蔽など) を恥特性として測定する風潮があるが、これらの特性は必ずしも恥体験と一致するわけではない。自己の情動的反応に対する意識的気づきのないまま逃避的行動をとることは、むしろ、恥の感情を欠くと言える。このような、ネガティブな情動体験を恥として意識化するという情動の意識化が、社会における適応的な行動調節としての恥にとって重要であることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計4件)

岡田顕宏、表情認知能力の個人差に関する研究 - パーソナリティおよび情動知能との関係 - 、北海道心理学会 第 54 回大会、2007 年、査読無

伊藤博晃、岡田顕宏、瞬間呈示下における表情知覚の脳半球優位性、北海道心理学会 第 54 回大会、2007 年、査読無

岡田顕宏、表情認知の個人差に関する実験的研究 ~ 外向-内向および特性情動知能との関係について ~ 、日本心理学会 第 72 回大会、2008 年、査読無

加藤祐介、岡田顕宏、準投影法的な恥感情尺度の作成 尺度作成に向けての予備調査、日本心理学会 第 72 回大会、2008 年、査読無

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

岡田 顕宏 (OKADA AKIHIRO)  
札幌国際大学・人文学部・准教授  
研究者番号：20337083

### (2)研究分担者

### (3)連携研究者